



初詣参拝者で賑わう御本殿前



平成十六年正月 三が日で五十五万人が参拝

平成十六年幕開けは天候に恵まれ、近年にない暖かさの中で迎えた。大晦日午後十一時には神門前に長蛇の列が出来上がり、開門を今か今かと待つ二年参りの初詣参拝者で溢れかえった。

開門すると例年同様一斉に参拝者が御本殿に流れ込んだが、一時間も経つと第一駐車場から御本殿まで、石畳に沿って列が出来上がるという珍光景が見られた。例年だと人波が一斉に流れ、境内は人・人・人となるが、今年は参道脇が空いているにも関わらず石畳上にビッチリと参拝者が整列、この流れは朝まで途切れることなく続いた。

このような時代の為か、正面から真剣に祈る人が増えた

2月祭事暦

- 毎月1・15日 月次祭
午前10時 高宮祭
第二宮・第三宮祭
午前11時 総社祭
- 2月 3日 午前10時 節分祭
- 2月11日 午前11時 建国祭

社紋「^{なら}橘の葉」
宗像大宮司家の家紋であり、当大社の社紋。現在この御神木は本殿西側に樹齢五五〇年を経過し、今も変わらず参拝者を見守っています。



石畳上に並ぶ参拝者

ためだとか、或いは暖冬のために待つことが苦でなかつたとか、テレビ・インターネット上で正面から参拝した方が良いと流れたなど諸説出たが、翌二日からはそのような光景はみられなかった。

このため参拝者の境内に滞在する時間が長くなり、必然

最近「スローライフ」という言葉をよく耳にする。ヨーロッパで言われはじめたようで、人生をもっとゆつくりと過ごそうというものである。我々の日常生活では自動車が行く音、テレビの音、エアコンの音等々、様々な機械的音がある。それを当然のように思い、雑音と感じている人はほとんどいないと思う。それに気付いたのは沖ノ島に勤務している時であった。毎朝海水で禊をし、本殿にて祭典を行なうあたり、たった一人の島では木々が風で揺れる音、鳥の鳴き声、波の音など、自然の音しか聞こえてこない、そこには機械的音は存在しないのである。平素、我々がいかにも様々な雑踏の中で生活していることを再認識させられ、自分達が失いかけている本来の生活とは何かを考える良い機会にもなる。

現代生活は時間に追われる毎日である。例えば一日一回寝る前に黙想し、心を落ち着かせるなど、ちょっとした余裕を持つ努力がスローライフの第一歩ではないだろうか。

その様な事を言いながらも私はこの原稿を作成するにあたり、沖ノ島でノートパソコンに携帯電話を接続し、本局の担当者に電子メールで送信している。現代のスピード社会に生きる我々にとって「スローライフ」と向き合うには相当な努力が必要である。

(M・A)



神具・装束 結婚式場洋品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番

株式会社 **井筒** 本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技

総合建築業 **株式会社 弘江組**

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



祈りをささげる参拝者

的に駐車場の回転が悪く周辺道路は大渋滞。社務所には「あとのどの位で到着するのか二境内の状況はどうか」などの問い合わせが殺到した。

二日は午前中雨が一時的に降ったが、午後には止み順調に例年並の参拝者を受け入れた。

三日は抜けるような青空の快晴。例年以上の参拝者が訪れた。

三が日の参拝者数は

一日 二二〇、〇〇〇人
 二日 一八〇、〇〇〇人
 三日 一五〇、〇〇〇人
 計 五五〇、〇〇〇人



御本殿正面



御本殿前 守札授与所

暖かさと天候にも恵まれ、昨年より五万人の増であった。

四日も日曜日が多く、五日からは仕事始の会社関係者、近県から



今年はこんな光景も見られました



神門より表参道を望む

の大型バスでの初詣ツアー参拝者が加わり、十六日現在でも昼前後には境内中が参拝者で溢れている。

津加計志神社

大鳥居・石燈籠奉納式

宗像大社境外末社で宗像三神を奉斎し神湊地区茶臼山に鎮座する津加計志神社で、去る十二月二十一日、午前十一時より大鳥居・石燈籠奉納式が斎行された。

当日は、津加計志神社氏子で鳥居奉納者、梶谷吉三・清子夫妻、同じく氏子で燈籠奉納者安部 實氏、施行業者の株式会社協和石材、津加計志神社奉賛会長河野一清氏外氏子関係者多数参列のもと鳥居・燈籠の清祓が行われ神前に奉告の祝詞が奏上された。

津加計志神社境内は、以前より石垣の一部崩壊、鳥居の老朽化等が懸念されてきていた。この状況の中、氏子より氏神様の境内整備をという機運が高まり、平成十五年四月一日に新たに奉賛会が組織された。最初に、氏子の皆様の浄財により、石垣の大修理が行われ、それを機に、割烹旅館「魚屋」奉納の春日燈籠として今回、「やまゑ鮮魚店」奉納の石燈籠・御手水石、割烹「鯛幸」奉納の大鳥居と、又、参道石畳整備、賽銭箱、太鼓修理、大注連縄奉納と続き、瞬く間に整備され、平成十六年の元旦、清々しい境内には例年の倍にあたる大勢の初詣の人々で賑わった。



筑前大島 中津宮の正月



日本一早い成人式を迎えた大島の12人

宗像四塚連峰旧玄

晴天に恵まれた新年を迎え、中津宮の神門前には開門を待つ人々の列が並んだ。午前零時定刻、浄暗の中に庭燎の炎が揺らめく境内に太鼓の音が響き、翼賛会員の奉仕により開門。村内氏子をはじめ、

正月を故郷で過ごすという里帰りした人々が先を競い神前へ進み、敬虔な祈りが捧げられた。神前には大島内外の漁家・農家よりの巨大な鯛をはじめ海の幸野の幸が山のように供えられた。

社頭はお守り・破魔矢・福迎え等の縁起物を受ける参拝者に加え、神門脇回廊に設けられた「新春福みくじ」授与所にも長い列ができ、今年の福運を授かるうとする人々で大いに賑わった。「新春福みくじ」は、例年宗像市の(株)城山家具(寺田 修社長協賛)より家具や家庭用品等の特別賞も用意され正月の楽しみとなっている。七百余本が準備されたが元日午前中で全て授与された。

海町の孔大寺山と、宗像市城山の間に位置する五嶺からなる金山から上がった金色に輝く初日で境内が明け始めた午前七時歳旦祭を斎行。本年の国家・皇室の弥栄と村民国民の幸福が祈念された。

一方、本年新たに企画実行された、奉賛会・巻網船団主催の「開運大鍋鯛汁」も好評で二日間わたり振る舞われ四百五十杯を数えた、合わせて海上タクシー「宝栄丸」より四斗酒樽も奉納され正月の中津宮境内は「持て成す人」「持て成される人」で賑わいを見せた。

二日は早朝より雨が降り出し、一時非常に強くなり心配されたが、祈願祭が始まる頃には上がり上天気となる。日本一早い成人式取材しようとするTVQ九州のスタッフは大型機材を持ち込み撮影準備、午前八時頃には新成人者も集合しハーサルを繰り返しながら緊張が高まる。十時より毎年慣例になっている三十三歳、四十一歳、四十四歳各々の厄除・厄晴の同年仲間祈願祭参列者と合わせ、境内は多くの人々に埋め尽くされ賑わう。テレビはタレントの中村有志アナウンサー加治屋朋子両氏の進行により「おめでとう！日本列島大縦断玄界灘の初春・十二人だけ

の成人式」のタイトルのもと全国生放映され、只一人大島に残り家業の漁師を継いだ宮本貴史氏を始め十二名の新成人の門出を祝った。又大島小学校三年生の江口麻侑嬢も緋袴姿で成人の神酒所奉仕を行い花を添えた。

三日には元始祭並びに宗像漁協大島支所願主の大漁祈願祭が斎行され、沖・中両宮奉賛会、漁業関係者が参集し皇室の弥栄と海上安全大漁満足が祈念された。

大島は殊の外同年の結びつきを大切にしており、二日の成人祭と十一日の還暦賀は特に盛大である。本年その還暦賀にあたる昭和十九年・二

御 礼

大晦日に齎行されました「年越しの大祓式」に際しましては、宗像市・郡内氏子各位並びに全国の崇敬者の皆様より、多数の人数をお寄せ戴き、お陰を以ちまして、盛大裡に滞りなく齎行致すことが出来ました。ここに、紙上を以ちまして謹んで御礼申し上げます。

平成十六年二月一日

宗 像 大 社

宮司 神島 定

崇敬者 各位

十年生申酉同年講三千名が島内外より集い、一月十一日午前十一時祈願祭を斎行、祭典後街々で御酒をふるまい紅白の餅を撒き、同年全員と大島村挙げてお祝いました。

かくして筑前大島の正月は絶好の日和に恵まれ、種々の行事日程も滞りなく進行され、中津宮の御社頭も大いに賑わった。

献米袋配布並に 取纏め御礼

一月十三日に齎行されました「献米報告祭」に際しましての、宗像市・郡内の氏子各位への献米袋配布並びに取纏めにつきまして、は年末年始のお忙しい中、御奉仕賜り厚く御礼申し上げます。

お陰を以ちまして盛大裡に滞りなく、盛大厳肅に齎行致すことが出来ました。ここに紙上を以ちまして謹んで御礼申し上げます。

平成十六年二月一日

宗 像 大 社

宮司 神島 定

宗像大社 氏子会

会長 安部 照生

宗像大社氏子会評議員

総代 各位

番組紹介 「瑠璃の路〜海の正倉院からシルクロードへ〜」



術を伝えた道でもある交易路「シルクロード」と、約一〇〇〇個を越える国宝が出土し、「海の正倉院」と称される極東の周囲四キロの島「沖ノ島」を中心に東と西とを結んだ文明の道をたどる。

去る十二月十九日、早稲田大学の吉村作治教授が来社し、RKB毎日放送関係者とともに当大社神宝館で収録を行った。
この番組は、当大社沖ノ島の岩陰祭祀遺跡から出土した「カッタグラス碗片(六世紀・ササン朝ペルシア時代を起点に、ユーラシア大陸を横断しある時は宗教の道、ある時は戦いの道、またある時は芸

出演者はエジプト考古学の世界的権威である早稲田大学の吉村作治教授と宝塚出身の女優で、ドラマや舞台などで活躍中の宮本真希さん。
ロケは当大社の他に、シルクロードの重要な中継地として栄えた中国・新疆ウイグル自治区の首都ウルムチから、四〇〇〇メートル級の山々が連なる天山山脈を越え、世界で2番目に大きな砂漠・タク

ラマカン砂漠に点在するオアシスを求めてキャラバン隊が旅を続けた。番組の中で吉村教授は「砂漠も海も実は同じ。見知らぬ世界に旅立つ人を支えたのは、神への信仰と勇気だった。」と語っている。
沖ノ島から出土した瑠璃の破片が、壮大な文明のドラマを語る。ちなみにタクラマカンとはウイグル語で「入ったら出られない」という意味である。

放送
二月十五日(日)午後二時〜
JNN
(TBS・RKB)系28局ネット
「瑠璃の路
〜海の正倉院からシルクロードへ〜」
提供!!サニックス



まつのお 松尾神社祭

去る十二月十九日午前十一時より当大社境内末社「松尾神社」に於いて、北築杜氏組合による酒造仕込みはじめの祭典が斎行された。
当日は、杜氏三名と当大社御神酒「神酒宗像」の伊豆本店、神酒糟の露の勝屋酒造の代表者が参列し、新酒の仕込みはじめの奉告・無事醸造終了を祈念し玉串を捧げた。
又同様に宗像大社本殿に於いても松尾神社祭が斎行された。
松尾大社は京都嵐山に鎮座する神社で、全国の酒造会社からの崇敬が篤い。この京都松尾大社の御祭神が宗像三女神（おんむすねのめがたみ）の市杵島姫神であることから、当大社もお酒の神様の本宮として崇敬を集めている。



昭和の初期、中津宮大島では全国組織の酒造講も組織され、大祭には本殿に全国の酒造会社の酒樽が山のように積み重ねられていた頃もあり、中津宮境内には、その当時を物語るように永代献酒の石碑が残されている。
宗像大社の松尾神社祭は毎年、師走十九日の酒造仕込みはじめの祭典と、弥生十九日の酒造報賽の祭典が行われている。この祭典も昭和三十年頃の記録を見ると「杜氏五十名参列」とあり、当時の日本酒の隆盛がしのばれる。
その後、高度成長時代にはいと、洋酒、ビールに主役を奪われ、そしてワイン、焼酎ブームとなり日本酒の冬の時代が続いている。近年の状況によると、福岡国税局管轄で一五二社あった酒造会社も現在は七二社という。
祭典終了後、斎館にて、伝統のかしわのすき焼「トリスキ」で直会を行い、自慢のお酒を頂きながら和やかなひと時を過ごし、最後に宗像大社の神札が授与され散会となった。
来る三月十九日の酒造報賽の松尾神社祭には、御神徳を頂き、米・水・麴・気象条件の絡みに杜氏の技で醸造した新酒が御神前に奉獻される。

石油業法廃止に初志貫く

政府は二〇〇一年(平成十三年)二月、通常国会に石油業法の廃止を含めた石油関連の一括法案を提出した。同年六月、石油業法の廃止は参議院本会議で可決され、二〇〇二年初にも改正する法律が施行される。

出光は一九六二年(昭和三十七年)の石油業法制定以来、一貫して廃止を主張してきた。三十九年ぶりに初志が実現することになる。

石油業界ではすでに「大競争時代」を迎えて、元売り大手の再編成や製油所の閉鎖など、動きが激しい。

出光が国際石油資本や産油国の動向も見据えながら、これにどう対応していくのか、佐三の理念、

決断力
その時昭和の経営者達は
瀧口凡夫

出光興産株式会社

出光佐三

店主 その14

業界の雄への飛躍

3



1963年(昭和三十八年)当時の給油所。出光は生産調整により生産が不足し、市場から割高な製品を調達し販売しなければならなかった。

主義主張とも絡め幅広い関心を集めている。

しかし、この問題は項を改めて述べる。ここでは、業法制定前後の経過とこれにたいする出光の主張を振り返ってみよう。

「黄金の六〇年代」は、欧州や日本に米国のドルが流出するという、貿易収支のアンバランスを伴っていた。戦後復興が進み、米国の圧倒的優位が崩れてきたのである。

一九五九年に開かれたガット東京総会では、米国が日本にたいし大豆など十品目の輸入自由化を要求した。応じなければ日本からの輸入を制限する、との報復措置を伴っていた。

政府は六一年にかけて「貿易・為替自由化促進計画」を決め、総合エネルギー政策を確立するため「エネルギー懇談会」を設置した。

懇談会は英、西独など欧州四カ国に調査団を派遣するなどして、同年十二月「中間報告」を通産省に提出した。これが石油業法の制定へと進み、六二年通常国会で成立した。施行は七月であった。

石油業法には三つの柱があった。需給の調整、精製設備の許可制、標準額の設定である。前のふたつは政府の石油供給計画を基本に、

年度を上、下期に分けて決めることになっていた。

このころ全国の販売シェアは、外資系がカルテックス・日石二〇・一%をはじめとして計六三%、非外資系が出光一四・四%を筆頭に計三七%六〇年度実績であった。出光は石油業法の制定そのものに反対であった。佐三の主張は、つぎのように要約される。

一、法律による統制は自由化に逆行する

一、安定的かつ低廉な価格を維持するという目的に反し、消費者のためにならない

一、国策会社の設立は屋上屋を架するもので価格を上昇させる

一、精製設備の許可制は利権化を招く

石油業法の施行によって、その後の焦点となったのは石油連盟(石連)による生産調整であった。

調整は難航し、とりあえず六二年度下期は生産、販売の実績、設備能力の三本柱で実施し、六三年度は新しい基準を設けることになった。

しかし、いざ実施してみると生産と販売のアンバランスなどが表面化し、下期の市況はたちまち混乱した。

(続)

決の寄物

181

いしい ただし



武田さんのルーツさがしの、月川喜代平主之は、長崎県北松浦郡宇久神浦村(現宗久町神浦)に明治七年(一八七三)に生まれた。家は代々宇久島神社の神職であった。現在第一五代月川徹氏である。宗像大社神島定宮司とは國學院の同期である。

『今浦島自叙傳』の月川船長略歴をたどると、彼は明治一四年、神浦尋常小学校卒業をして、母の弟の船に乗り働く。一七才の時、難破してアメリカ船に收容され、サンフランシスコで成功した人の写真を見て発奮、海外に夢を託す。

二〇代、国内・朝鮮海岸を廻航しながら徴兵検査を待つが、水兵第三番豫備隊員で海軍希望を断念。

二一才の時に長崎を出奔する。島原口ノ津より船大工に成りすまし、網の中にかくれて密航し上海へ渡る。上海では水夫宿に三ヶ月働き、父親に手紙を送る。四本マストの英帆船に二一才を二五才といつわり一等水夫になりすまし、

ロンドンで下船。

明治二八年(一八九四)日本郵船柴田丸に特務水夫として乗船。スエズ経由にて横浜港に帰着。明治二八年には横浜発ニューヨーク、中国のコースで契約乗船したが、中国で雇止を好まずニューヨークで脱船す。脱船後ニューヨークの公園に野宿。月夜の晩に淋しさのあまり、特技の横笛を吹いている時、日本人夫婦に拾われ、その家に二ヶ月働く。

明治二九年、米帆船に帰航後雇止め約束にて乗り込む。船は希望峰をまわってアジアへ向かうコースであったが航路を大きくはずれてニュージージーランドの南島の、南東岸オタゴ湾の最深部ダニーデン・チャルマー港にたどりついた。ギヤプテン月川物語(松見正宣)では漂着とある。給金のこと船長と

口論して脱船し、山奥に三日間かくれ、農夫に助けられる。この農場に三年間働く。

明治三四年(一八九九)一時帰国四ヶ月滞在して再び出国。ニュージージーランドが忘れられず、引き返そうとしたがキップが手に入らず、香港まで買い、香港でもニュージ

ーランド行きのキップが手に入らなかった。たまたま香港に入港していた日本の練習艦隊はニュージージーランドにむかうと聞き、司令官上村中将の許可を受け船島艦に乗艦、時化で三艦に故障が生じ、ニュージージーランド寄港が取り止めとなり、オーストラリア・シドニー

で下艦する。

ニュージージーランドに渡り、明治三七年(一九〇二)ニュージージーランド小局のノーライド号の一等水夫となる。明治四〇年救世軍軍曹となり明治四三年三才の時、日本人として英国の一運転士となる。大正三年(一九一三)オーストラリア・メルボルン出身のクラークと結婚。長男一東郷、次男一乃木、三男一伊藤を出生。明治を代表する人物の名を子供達につける。その後の活動は紙面の関係で割愛するが、河川局の船長として活躍し、日本人としてニュージージーランドのために働き、尊敬を受け、高く評価されることになる。

昭和十一年(一九三六)三六年ぶりに帰国、宇久島に三泊四日滞在母にもあつている。昭和二十三年十二月に神に召され永眠。享年七十四才。波乱万丈の人生だったが、ニュージージーランドで果たした役割は大きく、また日本人の誠実さを示した人物として今も多くの人に記憶されている。現在子孫はニュージージーランド各界で活躍している。昭和五三年(一九七八)にはノギツキカワ夫妻が日本を訪問している。私達もノギ氏の家で子孫達と会いパーティーを楽しんだ。



ニュージージーランドにてノギ・ツキカワ氏



神郡宗像

末社めぐり

三十四許斐三御前社(八幡神社)

宗像大社から東南方面に約10km、頂上に境外御撰社の一社、王子神社が鎮座する許斐山の麓、宗像市王丸字尾中の民家の間に、昭



和三十四年に整備された参道を進み、石鳥居を潜り石段を上ると、まだ真新しくみえるコンクリートの参道が拜殿に真直ぐ続いている。正平年中行事、許斐権現の眷屬小神のうちに、「三御前一所」とあり、同じく三御前神事の條には祭事の記述、應安神事次第の正月十七日の條には、「次三ノ御前ニテハ千秋萬歳舞、踏歌アリ。」とある。續風土記拾遺「十八宗像郡中の王丸村の條に、「若宮八幡宮 王丸村の産神也。所祭應神天皇・神功皇后・武内大臣と云。此説いふか。宗像神の御子神なるへし。宗像神事次第記に、許斐従神の中に三御前一所とあるは此社也へし。年中の次第は王子神社に同じ。神殿・拜殿・幣殿有。村の内、森の中に在。御社は異向也。昔は是より二町計良、村下に有しを、寶永二年(一七〇五)故有て爰に遷し奉る。」

とあり、棟札を挙げて、天正九年(一五八二)大宮司氏貞の造替したことが記されている。

現在の御祭神は、應神天皇・神功皇后・武内大臣。由緒は、「豊田天皇(神)天皇御誕生ノ翌年春二月國母皇后筑紫ヨリ長門國豊浦ノ宮に移り給フ時、此所に御鳳輦ヲ駐メ給フ。其陣迹ニ此年御社ヲ創立スト云。宗像大宮司代々造營也。現存の本殿は一間社流造の銅板葺で、文化四年(一八〇七)の建立とされ、黒田長成候爵書の扁額がかげられた瓦葺拜殿と同じであり、一九五坪余りの境内、氏子数は約四十戸、境内には素盞鳴命をお祀りし、近年新たに御造營された須賀神社が鎮座している。

すぐ近くに国道三号線のバイパスが通っているが、車の音はさほど気にならず、境内は氏子の人々により良く手入れされている。竹林に囲まれた心休まる古社である。



御用船「宝栄丸」新造船に



て海がもたらす恵みと怖さを良く知っている。その為、沖津宮に対する畏敬の念が篤い方で、五年前に体調を崩され漁師を続ける事を断念、現在は、大島と神湊間を結ぶ海上タクシーを営む傍ら当大社の御用船として御奉仕頂いている。

宗像三宮のひとつ、沖津宮が鎮座する沖ノ島では当大社神職が一人渡島し、中・邊津宮と同様に一年三六五日、一日も欠かすことなく、三宮一体の祭祀が脈々と行われている。現在、沖津宮奉仕者は一回の勤務を十日間とし、大島の海上タクシー宝栄丸船頭佐藤守氏で神湊港から沖ノ島へ渡島しているが、この度その宝栄丸が新しく船を造船した。

佐藤氏は以前、漁師をされており、沖ノ島近海で漁をすることも多く、この付近は庭みたいなのだと話し、沖ノ島は女界灘の絶海の孤島、穏やかだった海が瞬時にその表情を変え、ここで漁をする者にとつ

新造船は伊万里の浦田造船所で三ヶ月の月日をかけて造られ重量十二トン、運行速度二十九ノット(最高三十八ノット)、最大乗船人数十二名で、十二月八日に就航、大島で盛大に進水式が行われ、又十二月十七日には沖ノ島勤務交代で始めて沖ノ島へ渡島した。旧船は漁船を改造したもので約二時間を要していた航海時間も、一時間弱での渡島が可能となり、また荷物も以前の何倍もの量を積むことができ、灯油・ガス等の島での生活物資の運搬も容易になった。

今後、新造船は佐藤守氏と、佐藤氏の甥の草野隆則氏(二十歳)で操縦運行される。



草野 隆則氏



佐藤 守氏

第五一〇回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日夕切



日の里 大和 美由紀

牡丹槽あかあかと燃ゆ炬を囲み集ひしはみな倅せいたたく

(評) 失明に近い白秋が、焚木として牡丹の木ひとくりを送られ「冬牡丹の木を焚く」ということは、話に聞いてゐたが、それは何という高貴な雅びかと思つて詠書して牡丹の黒木さしくべゐるりべやはかほかとあらむ冬日おもほゆと詠つてゐるが、牡丹の槽火を囲んだ大和さんが羨しく新春にふさわしい一首である。

田熊 吉田 ますみ

目を病みて字の読めざるもよしとせむ美しき花青き空見ゆ

(評) 前記の白秋は失明に近い状態にありながら、視力と引き替へに「ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の大ききあり小ききあり小ききあり大ききあり」と、こんな子供のような聴覚とよるこびを取り戻してわれわれに勇気を与えてくれるが、吉田さんの「美しき花青き空見ゆ」は白秋に劣らない素晴らしい気力である。御加餐を祈る。

鐘崎 安永 久子

肩肘の力を抜きて日々あれと老化の兆すおのれにきかす

(評) これも自励のうたである。具体的に詠うとすれば「町に住む子らに心配かけまじとひとり居われの晩酌ほどほど」八十六歳男性。となろうか。老いを逆手に取つて存在感のある作品を具体的に詠つて欲しい。

日の里 神田 一敏

流れ去る落葉もあれば渦巻きてまた水口に戻る葉のあり

(評) 農業用水の水抜き風景だろうか、作者はそんなものを一切消し去り水口をめぐる落葉に視点を集中し詠い、人生の一句を暗示していると言つたら言い過ぎだろうか、なかなかの逸逸である。

東旭ヶ丘 天野 玲子

病ひ持つ友の作りし大根のほればれする程太くたくまし

(評) やさしさとユーモアのある一首。大根卸しにても、獅子大根にしてもさぞ旨い大根だろう。

吉留 高山 信子

たかむらを切り通したる赤土に黄菊むれ咲くひと枝ほそき

(評) むれ咲くと、ひと枝ほそきの状がうまく結び付かず残念。「黄色の野菊枝伸べて咲く」などの詠み方も考えられる。

福岡 中村 勇

川沿ひの細道ゆくに白鷺が道祖神のご前をとびゆく

(評) ここに詠われているのは石に彫られた道祖神でなく、道路の悪霊を防ぎ守護する神としての存在のことで、作者には白鷺が神の使いと映つたのだろう。特異なところである。

大井 木原ふさ子

住む人のなくて荒れたる山の家灯ともすこと咲く藪椿咲く

池田 森 龍子

落葉して木々の間広き冬庭に散りたるままに山茶花華やぐ

朝野 藤井 浩子

北のさま細ごま知らせてくれる友雪国生まれの吾と知れるや

田野 森 甲子

窓に見る犬鳴山は秋空に稜線やさしく横たはりをり

牟田尻 横山 雪子

春のわが夢をやどして芽生えたり一ミリほどの紫雲英の双葉

光岡 森田 富佐子

小春日の続きで今日はとの曇るやがてみ冬の景色となるらん

大島 杉田 禮子

寒風にゆらく終りのコスモスの傍らにりと水仏が咲く

日の里 石松 弘次

にぎり飯のかたちを見せる六つ嶽遠目にみやり郷の恋しも

光岡 河村 久光

農道を日傘さす女近まりくじつと見る間に気の遠くなる

選者詠

腰痛の癒えしと言へど晩年か玄海しぐれ庭濡らし過ぐ

掃き寄せし落葉のなかより現はれぬ土色蝗げん顔にて

落葉掃き終へたる庭に鞠きて啼くなへうたの心くすぐる

宗像大社歌会 俳句作品集(四八五)

福岡 森 清

枯む川面に風情小揺れけり

東郷 田中 憲象

新立の裾の工場初雪

光岡 井上 嘉治

黄昏の身にも初雪限りなく

日の里 花田 いつ枝

娘ストープにすべる湯玉や久女の忌

編集後記

我々にとつて、大きな正念場の正月が終ろうとしています▼今までと違い「職務」を果たすこと以上に、「責任」というものと「重圧」を感じる正月でした▼その「責任」とは中々大変ですが、大きければ大きいほど果たした時の充実感は大いいもので、積み重ねると「信頼」というものにも繋がるらしく、そして意外と楽しいものだとも気付かされたひと月でした▼本年も社報「宗像」をよろしくお願い申し上げます。(M・O)

発行所 宗像大社社務所

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1331(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ジーエータップ
印刷 ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円